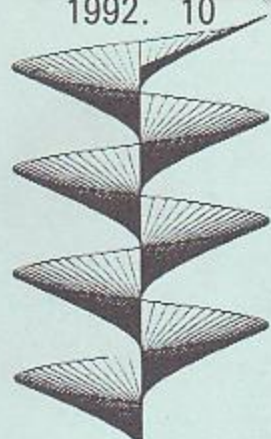


1992. 10



はるかにくす

No. 29

大阪工業大学図書館報

科学技術の 新しい流れ

半導体トランジスタの発明から約半世紀が過ぎた。この間、半導体の他にも新物質が次々に発明され、エレクトロニクスをはじめ広い分野で利用されている。最近の新物質には、原子を1個ずつ配列してできた1次元や2次元構造をもつ人工結晶もある。一方、生体の謎についても研究が進み、生物システムや遺伝子の働きについての理解が進んでいる。

ダイヤモンドは炭素からできた美しい結晶である。他に炭素の結晶として黒鉛がある。この炭素原子が結合してつくるサッカーボールの型をした第3の分子が、最近発見され話題になっている。この60個の炭素原子が結合した“フラーレンC60”は、超伝導や触媒などの機能を示し広い分野から注目されている。

エレクトロニクスの分野でも、新しい光デバイスや高速デバイスが作られている。昨年、これまで不可能だった青色の半導体レーザが初めて作られた。近い将来、壁掛テレビ等への利用も考えられる。さらに、最近注目されているデバイスに単一電子トランジスタがある。たった1個の電子の動きを利用することが可能になった。また、電子の別の性質、すなわち電子の波としての性質を利用した高速デバイスも実現可能になった。これは身近な量子力学の世界である。近い将来、学生諸君の量子力学に対するイメージも変わるかもしれない。

以上述べたように、最近の科学は遺伝子から原子1個の操作まで、ミクロの世界に人間の手

電気工学科教授
新材料研究センター
工学博士

井上正崇



が届くようになった。今から100年前の19世紀後半には、ベル、エジソン、ディーゼル等が活躍し、今日の生活必需品を発明した。この第2次産業革命が、我々に便利な生活を与えてくれた。今、はたして我々は次世代の人のために何ができるか。このような意味からも、次の世代の技術者を目指す理科系卒業生に対する社会の期待も大きい。

富士山麓にある有名企業の社長さんが次のようなことを書いている。“技術には歴史がある。しかし技術者には過去がない。ただ創造あるのみ。(稲葉 清右衛門)” 大学では、先ず基礎を学ぶ。そして専門科目を勉強する。しかし、よく言われるように数年もすると、学んだ知識の半分以上は陳腐化することは事実である。私は若い学生諸君に、新しい科学の流れに常に興味を抱く柔軟な姿勢と、それに熱中する心を期待したい。

毎月出版される科学雑誌をはじめ新しい情報に、自分の専門をこえて接して欲しい。最近の科学雑誌は、外国との提携等により内容も充実し、図や写真も美しい。もし興味ある記事に出会ったら、その参考文献を探しオリジナルな論文にも接することを勧める。また、時に芸術や文学にも接し感性を磨いて欲しい。

最後に、ベル研究所の玄関にある電話の発明者グラハム・ベルの言葉を引用する。

Leave the beaten track occasionally and dive into the woods. You will be certain to find something that you have never seen before.

Our Library

建築学科 4年次 乾 憲 史



図書館は、私にとっては色々な意味で非常にありがたいところです。レポート作成や卒業論文などではたくさんの情報収集が必要となり、連日図書館に通いつめることも少なくない。

また、試験期間中、特に夏場などは空調が利いていて勉強もはかどると思う。ちょっと時間が空いた時には、雑誌や新聞を読んだりして暇つぶしもできるし、時刻表や地図、ガイドブックなどもあるので、旅行の下調べなどもできる。

このように便利な図書館であるが、最近、一部ではあるが利用者のモラルが低下しているというか、マナーの悪さが目につき不快な思いをすることがたまにある。

まず思いつくのが大声でしゃべるということである。3階図書室ではあまりこういうことはないのだが、4階閲覧室で、特に試験期間中などには、利用者が多いというのがあるが、それでもかなりざわついていて、どうしようもないときもよくある。少しぐらいなら仕方ないと思うが度が過ぎると迷惑である。



また、よく見受けられるのが、以前からも指摘されているのだが、閲覧後の図書を元の場所に戻さないということである。読みたい本が見当たらず、誰かが借りているのかと思うと全く違った場所にあたりする。困ったものである。

2階のホールでは、飲み終わったジュースの空コップがそのままテーブルの上に散らかっていることがよくあり、次の人が利用しにくく見た目にもよくない。

これらは図書館だけの問題ではないが、他の人がやっているから自分もかまわないという軽い気持ちがあるようで、悪い事と思いつつ、『まあ、これぐらいはいいか』と思ったことのある人は私自身を含めて多いだろうと思う。図書館を気持ちよく利用するには、このような考え方のままではいけない。一人一人が自覚を持って利用者としての最低のマナーは守るべきである。難しいことではないと思う。

新6号館やメモリアルゲートも完成し、大学も様変わりしたが、図書館の利用価値の大きさは今も変わらない。いつでも気持ちよく利用できる我々の図書館であってほしい。

できるという仏教の考え方、が一体となりすべてのものに『魂』があるというのが日本の宗教の特色である。

このことを理解しその精神を維持、発展させていく方法が地球を救う道であると著者は言っている。

自然保護か、開発か、時の為政者は後者にウエートをおく、何故ならば前者では金にならない。しかし、そのつけは必ず後世にやってくる。仏教でいう『宿業』(しゅくごう)である。

ゴルフ代は、高額となり一般庶民にはほど遠い存在になった方がよいのかも。

これが自然保護になるように思われる。

(請求記号 160.4 U 第1図書室)



『森の思想』が 人類を救う

梅原 猛 著
(小学館)

現代、地球環境が深刻な問題になってきている。従来人間は万物の長であり、すべての動物・植物を支配する権利を持つものと思われてきた。しかしこの自然支配の考え方では美しい環境をとりもどすことが出来ないばかりか現状維持さえ困難になってきている。

地球の危機から救う方法として、生きとし生きるものは平等であり、同じ生命を持つという自然崇拜の神道の考え方、人間ばかりではなく、動物や植物、さらに山や川まで仏性があり成仏

シリーズ 淀川ぶらり散策

第20話

「大阪弁 その3 大阪と文化 2」

浅井 三千治

葦の穂の先をそよがしながら、淀の川面に吹く風は、爽やかな秋の風だ。澄んだ風は、思索の世界へとかりたててくれる。

秋...文化...

浅井三千治は「文化という語にルビを振るとしたら、ハニカミだ」と、言ったそうだが、うまく表現したものだ。

つぎの表は、京阪神の各都市についての、あるイメージ調査結果である。

	第1印象	花	色	人	理想	全体像
大阪	商人	バラ	赤	男	力	情熱
神戸	港	アザイ	青	青年	希望	フレッシュ
京都	寺	菊	紫	女	美	みやび

開放的で軽快な明るさの神戸、古都千年の重みを持つ京都に対し、バイタリティに富んだ、アクの強い大阪の姿が浮かぶ。アクの強さは、大きな魅力であるが、度が過ぎると鼻につき、そのよさまで殺してしまう。この調査から窺える大阪のイメージは、ハニカミの世界、文化とはほど遠いものだ。上品とは言えない。「下品でもいいじゃないか」と言ってしまうまでもだが、それでは少しさみしい気がする。

大阪市の都市問題研究会が発行する「都市問題研究」8月号では、各都市の担当課の手になる「21世紀への都市像」が特集されていた。各レポートの中で、「文化」という語の使用回数を数えたのが、つぎの表である。

都市名	数	都市名	数	都市名	数
札幌	6	仙台	6	千葉	12
東京	5	名古屋	8	京都	30
大阪	55	神戸	13	広島	15
北九州	6	福岡	14		

大阪では、「文化」の語が大もてだ。これは、大阪の町に「文化」が不足していることが、強く意識されていることの反映と言えよう。

文化というと、何か高尚な響があるが、「大阪は文化不毛の地」と言う時の文化の意味は、もう少し意味あいが違うのではなかろうか。

大阪在住の作家、司馬遼太郎氏は、「何と云っても町がきたなすぎるということが、大阪の致命的な欠陥ではないかと思う」、「大阪はとにかく物凄いところですよ。私はここがほんとの大阪やいうところに住んでいるので、よくわかる。・・・私のところは市長さんが一所懸命樹を植えてもみんな抜いていきよる。」と述べている。

恥じらう心が欠けている町と映るのが、「文化不毛うんぬん」と言われる由縁であろう。

言葉の問題もそうだ。きれいな大阪弁を守るとか、残すというような次元の問題ではない。

卑しい、下品な恥じらいの精神を欠いた言葉が大阪弁として、横行するようになった。その大阪弁に投影されている、今の大阪の社会の在りよう、心の世界の在りようが問題なのだ。

汚ないのは、環境も同じだ。わが淀川も大和川とならび日本のワースト河川の代表格だ。

「東京の人が、大阪の水はまずい、と言っていたから、大阪の水が一番まずい」だの、「京都の水は、くさいで、そやけど大阪よりはましやは」という話をよく耳にするが、河川や大気の汚染は深刻だ。

どうも明治以来、大阪では、利便性とか、経済効率を優先し過ぎ、自分自身や暮らし、生活を大切にするために、主張したり、主体となって取り組むことに、消極的であり過ぎたようだ。

グリコ・森永事件のキツネ目の男を、追いかけてながら、味わいのある、きれいな大阪弁を探し求めてきたら、どうも厄介なところに迷いこんでしまった。大阪弁の問題は、大阪のありようの問題のようだ。これ以上の深追いはやめることとしよう。

きたない大阪と言われるが、空気が澄み、水がきれいになり、街が美しくなれば、人々の心は豊かになり、自ずと文化の花は開くであろう。また、それにふさわしい言葉が、大阪の街で語られていることであろう。

ダメだと言われていた阪神が頑張ったように、その日がくることを、期待しよう。

